

## 論文審査の要旨

報告番号	保研 第 <b>15</b> 号	氏名	下吹越 直子
審査委員	主査	新地 洋之	
	副査	丹羽 さよ子	副査 中尾 優子
	副査	根路銘 安仁	副査 牧迫 飛雄馬

**Development of an Assessment Scale for Commencing Home-Visit Nursing in Japan:  
Examining the Construct**

訪問看護導入を判断するアセスメント指標の作成における構成概念の検討

主査および副査の5名は、令和元年5月31日9時から10時10分にかけて、学位請求者下吹越直子が論文発表を行った後、論文審査を実施した。その発表要旨と審査結果は以下のとおりであった。

**【研究目的】**

日本は少子高齢化が進展し、医療・介護提供体制改革により地域包括ケアシステムの構築が推進・強化され、在宅医療の充実を重視することとなり訪問看護等の計画的整備が進められることになった。介護保険法におけるケアマネジメントは、ケアマネジャー（以下CM）が心身の状況等を勘案し、ケアプランを作成してサービス事業者等との連絡調整を行う。在宅療養者の具体的な状況やCM自身の状況を含んだ訪問看護導入に伴うアセスメントツールは見あたらず、医療ニーズを有する利用者へのケアマネジメントに対する困難や、訪問看護導入の判断に医療知識の不足が影響する等の報告がある。すべてのCMが多面的かつ適確なアセスメントができるような指標が必要と考え、本研究はその第一段階として、訪問看護導入の判断となるアセスメント指標の構成概念を明らかにすることを目的とした。

**【調査方法】**

まず、先行研究として看護職CMと介護職CMそれぞれに質的に調査を行い、その結果をもとに136項目の質問紙を作成した。調査対象者は、A市内すべての居宅介護支援事業所181ヶ所（2017年4月現在）に勤務する471名とし、郵送法による質問紙調査を実施した。回答済質問紙は、各自で返信用封筒に入れ投函し、郵送により回収した。調査内容は、対象者の属性（性別、年齢、保有資格、保有資格での経験年数、CMとしての経験年数）およびCM自身が利用者へ訪問看護導入が必要と判断する136項目とした。データ分析は、項目分析、探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行い、信頼性の検討は、クロンバック $\alpha$ 係数を用いた。

**【結果・考察】**

郵送により返送された回答済質問紙211部のうち200部を分析対象とした（回収率44.7%、有効回答率42.4%）。項目分析により17項目を削除し、最尤法、プロマックス回転による探索的因子分析を行い、因子構造を確認した。因子は【利用者の生活状況と必要な日常生活の支援】【利用者への医療面の支援の強化】【利用者の医療的処置・管理と療養の時期】【利用者の心身状態の悪化予防と備え】の4因子、96項目で構成され、構成概念妥当性が確認された。信頼性において、クロンバック $\alpha$ 係数は全体で0.974、各因子で0.933～0.963であった。訪問看護導入を判断する構成要素である96項目は、十分な信頼性を持つことが確認された。

今後、項目の精選、構成概念の構造化等の課題が残されているものの、今回明らかにされた構成概念が在宅療養者への適時な訪問看護導入に向けての一助となることが示唆された。また、高齢化が急速に進み介護保障制度が追いついていない韓国、シンガポール、中国などのアジア諸国においては、日本の介護システムが注目されており、それらの国においても今回明らかにされた構成概念がモデルになるものと考えられる。

審査の結果、本論文は、ケアマネジャーの適時な訪問看護導入への支援となり看護の発展に寄与するものであることから、5名の審査委員は、博士（保健学）の学位論文としての価値を十分に有すると判定した。